

# 自 発 的 受 身

仁田 義雄

## 0 はじめに

本稿の目的は、従来〈自発〉と呼ばれ考察されてきたものを、受身の一種と位置付け、下位的タイプに分け、各々の特徴について、その概略を考察することにある。一般に自発と呼ばれるものを、本稿では、〈自発的受身〉と仮称し、受身の、しかも、〈まものの受身〉の特殊なタイプとして位置付ける。

したがって、まず、筆者の設定する受身の下位的タイプについて、ごく簡単に見ておく。

[洋平ガ博ニ叱ラレタ⇔博ガ洋平ヲ叱ッタ]のように、能動文中に存在する非ガ格の共演成分<sup>1)</sup>をガ格に転換し、それに従って、ガ格の共演成分をガ格から外した受身が、〈まものの受身〉である。それに対して、[僕ハ雨ニ降ラレタ←雨ガ降ッタ]のように、もとの動詞の表す動きなどの成立に参画する共演成分としては含みようのない第三者をガ格に据えた受身が、〈第三者の受身〉である。さらに、[憲ニハ頭ヲ博ニ叩カレタ⇔博ガ憲ニノ頭ヲ叩イタ]のように、もとの文のヲ格やニ格(これは稀)の共演成分の持ち主を表す名詞をガ格に取り出し、それに従って、ガ格の共演成分をガ格から外した受身が、〈持ち主の受身〉である。

## 1 自発的受身とは

従来、自発と呼ばれていたものは、その位置付けがさほど分明であったとは言いがたい。本稿では、文構造および対応する文の想定が可能なことなどから、まものの受身の一種として位置付ける。そして、それを〈自発的受身〉と仮称する。

従来の自発、本稿で〈自発的受身〉と呼ぶ文の典型は、

- (1) 故郷ノコトガ懐カシク思イ出サレル。
- (2) 彼ノ見識ガ疑ワレル。

のようなものである。この典型的な〈自発的受身〉は、次のような特性を有している。[Ⅰ]〈自発的受身〉は、その事態がおのずから生じたものであると、いった意味合いを帯びている。これが、従来、このタイプのものを、〈自発〉と呼んで、〈受身〉とは少し異なった取り扱いをさせた最大の基因であろう。次に、[Ⅱ]能動文のガ格成分は、〈自発的受身〉においては、表現形式の上に顕在化しないのが普通である。また、〈自発的受身〉において、通常顕在化させられることのない能動文でのガ格は、話し手であるのが普通である。特に、受身動詞がル形である場合は、その傾向はさらに強い。[Ⅰ]の性質には、〈自発的受身〉を形成する動詞が、内言系の思考・認知動詞であり、感情動詞であるといったことが、大きな影響を与えているのであろう。この種の思考・認知動詞や感情動詞の表す動きは、完全には自分の意志で自由に制御することが不可能なものであったり、自己制御できなかつたりするものである。

もっとも、こういった[Ⅰ][Ⅱ]の性質は、典型的な〈自発的受身〉には、そのまま当てはまるが、〈自発的受身〉が典型からずれていくにしたがって、それが有している特性をも変質させていくことになる。

これらのものを、受身、しかも、まどもの受身の一つとして扱うのは、次のような理由による。これらに対しては、

(Xガ)故郷ノコトヲ懐カシク思イ出ス。                      (Xガ)彼ノ見識ヲ疑ウ。

故郷ノコトガ(φニ)懐カシク思イ出サレル。                      彼ノ見識ガ(φニ)疑ワレル。

のように、対応する能動文でのガ格成分は、受身文の表現形式には現れていないものの、外のまどもの受身と同様に、能動文のガ格が受身文での非ガ格へ、能動文での非ガ格が受身文でのガ格へ、といった表層の表現形式への交替現象が起こっている。もっとも、〈自発的受身〉を形成する動詞の中核の一端が、埋め込み文をも取りうる内言系の思考・認知動詞であることによって、この受身には、能動文での非ガ格が、受身においてガ格化しない例文(6)のようなケースが生じてくる<sup>2)</sup>。

以下、少しばかり実例を挙げておこう。

(3) 「もう五月だ。さんざしの花が咲くころだ。」

こう思っただけでも涙が落ちて来るのでした。小鳥が鳴いたり、さんざしの花が咲いたりする故郷のことが思い出されるのでした。

(壺作り)

(4) 人の一生には、極度に退屈な時がたまにあるもので、幼い頃の思い出

に<sup>てら</sup>徴しても、<sup>こども</sup>児輩の神経はそういう場合に耐えて行く、意外な強靭さを持っていることが考えられる。(かむなぎのうた)

(5) しかしいまの話によると、若林たけ子のほうから計画的な意図を秘めて接近してきたことが察せられるのである。(急行出雲)

(6) こんなことなら、店や家をあけるのではなかったと悔やまれた。

(厄介な荷物)

(7) ～竹柱を二本たて、それぞれに竹釘を打った、刀掛けがもうけてあった。いかにも旧藩主の茶室にふさわしく、また代々阿部井氏の、愛刀ぶりがしのばれてくる。(安房国住広正)

のようなものが、本稿で言う〈自発的受身〉にあたるものの一端である。以下、先に触れた〈自発的受身〉の特性について、もう少し詳しく見ておこう。

## 2 副詞的修飾成分と〈自発的受身〉

「事態のおのずからの出来」といった意味合いを有しているのが、〈自発的受身〉であってみれば、〈自発的受身〉が取る副詞的修飾成分には、ある種の制限と傾向が存することになる。「自然ト、オノズト、思ワズ、知ラズ知ラズ、無意識ニ、何トナク」などといった主体の非意図性を表す副詞的修飾成分は、共起するものの、「無理ニ、ワザト、ワザワザ、ムリヤリ、故意ニ」といった主体の意図性を表す副詞的修飾成分は、共起しない。たとえば、(3)を、例に取れば、

(3') 「モウ五月ダ。サンザシノ花ガ咲クコロダ。」

コウ思ッタダケデモ涙ガ落ちテ来ルノデシタ。小鳥ガ鳴イタリ、サンザシノ花ガ咲イタリスル故郷ノコトガ自然ト 思イ出サレルノデシタ。

(3'') 「モウ五月ダ。サンザシノ花ガ咲クコロダ。」

コウ思ッタダケデモ涙ガ落ちテ来ルノデシタ。\*小鳥ガ鳴イタリ、サンザシノ花ガ咲イタリスル故郷ノコトガワザワザ 思イ出サレルノデシタ。

に示されているように、主体の非意図性を表す副詞類を付け加えた(3')は、適格な文法的な文であるが、主体の意図性を表す副詞類を挿入した(3'')は、逸脱性を有した文になってしまう。

受身化した時に、「事態のおのずからの出来」といった意味合いが出てくる

ことは、能動文であれば、「僕ハ無理ヤリ故郷ノコトヲ思イ出シタ。」のように、意図性を表す副詞類の付加が可能であることから分かるだろうし、「事態のおのずからの出来」が、〈自発的受身〉の特性であり、受身一般の性質ではないことは、他の受身では、「僕ハ先生ニ故意ニ叩カレタ。」のように、意図性を表す副詞類の付加が可能であることから分かる。

### 3 自発的受身の二種

#### 3.1 契機的自発性と論理的自発性

既に述べたように、従来〈自発〉と呼ばれ、また本稿でも〈自発的〉受身と位置付ける最大の理由は、〈自発的受身〉の特性の第一として挙げたこの表現の持っている「事態がおのずと生起する、自然にそうなる」といった意味合いであった。したがって、このことについて、少しばかり見ておこう。この「事態がおのずと生起する」といった意味合いの中身、あり方は、〈自発的受身〉を形成する動詞のタイプによって、やはり少しずつ異なってくる。

この「事態がおのずと生起する」の「おのずと」といった意味合いのあり方には、大きく二つのタイプがあるようである(もともと、両者の差がほとんどないような場合もありそうで、常に截然と分かれきるとは限らないだろう)。  
[I]第一のタイプを形成する動詞は、「偲ブ、悔ヤム、氣遣ウ、感ジル、懸念スル、心配スル」のような感情動詞を中心にして、「{恋シク/懐カシク/腹ダタシク/苦々シク}{思ウ/思イ出ス}」のように、全体である種の感情活動を表すものや、「祈ル」などである。これは、〈自発的受身〉として表されている事態の出来が、ある出来事・事態を契機として、それから自動的に引き起こされる、といったものである。これを、〈契機的自発性〉と仮称しておこう。それに対して、[II]第二のタイプを形作る動詞は、「考エル、理解スル、想像スル、予想スル、見ル、解釈スル、推測スル、察スル、感ジル」などの思考・認知的活動を表す動詞として使われたものである。これは、ある事態や状況が判断・思考の前提として存し、その前提からすれば、〈自発的受身〉として表されている思考・認知活動の対象たる内容の成立が、当然であり自然であり、判断・思考内容の成立の当然さ・自然さを通して、そういった内容を引き出した思考・認知活動の出来が、当然であり自然である、といったことを表したものである。これを、〈論理的自発性〉と仮に名付けておこう。さらに、「感ジル」や「思

ウ」は、使い方によって、そのいずれをも形成しうるだろう。

### 3.2 契機的自発性

まず、〈契機的自発性〉の方から見ていこう。「コノ写真ヲ見テイルト、自然ト学生ダッタアノ頃ガ懐カシク思イ起コサレル。」のようなものが、〈契機的自発性〉の一つの典型であろう。「コノ写真ヲ見テイルト」や「自然ト」といった契機を表す従属節や副詞の存在によって、〈契機的自発性〉の〈自発的受身〉であることが明確に示されている。もっとも、このような、契機を表す従属節の表現と自然発生を意味する副詞がともに現れるような例は、実例では稀であろう。以下、この〈契機的自発性〉の〈自発的受身〉の実例を、少しばかり挙げることにする。

- (8) その、高麗犬のような顔を見ていると、なぜともなく死んだ父の顔が思い出されてきた。(トルストイ爺さん)
- (9) 私は、今住んでいる東京の郊外に、あられが淋しい音を立てて落ちてくる頃、ふと、その西岡村の、お祖母さんの生まれた家を思い出すことがあります。すると、それといっしょに小さい時、お母さんから聞いた話が、きつと思い出されてくるのであります。(梅漬)
- (10) 何か大事件が、このホテルで突発するのではないか……  
こう思うと、私もなんだか恐ろしい不思議な胸騒ぎが感じられてならないのだ。(妖婦の宿)
- (11) それらのものが身边近くあった時には用いなかったくせに、焼失させたと極ると、きゅうに日常欠くべからざるもののように見做された。  
(戦災者の悲しみ)

などが、この〈契機的自発性〉の〈自発的受身〉の例である。これらは、いずれも、下線部の「～スル。スルト、」「～スルト、」などのような、事態を契機的に後続節に結び付けていく形式を伴い、それらによって表される事態を契機として、それから自動的に自然と引き起こされる事態を表している。(8)などは、契機となる事態と、事態発生の非意図性・自然発生性を表した副詞的修飾成分とが、ともに文の表現形式の上に現れている。自発といえば、この種の〈契機的自発性〉が、すぐ取り挙げられるが、この種の〈契機的自発性〉の〈自発的受身〉は、そう数は多くはない。〈自発的受身〉に属すると思われるものの多数は、むしろ、次に触れる〈論理的自発性〉のタイプのものである。

既に触れたように、〈契機的自発性〉の〈自発的受身〉を形成する動詞の中心は、感情活動を表す動詞であった。しかし、「案ジル、悔ヤム、感ジル、懸念スル、氣遣ウ、偲ブ、心配スル、望ム、羨望スル、期待スル、ハバカル」などを除いて、あまり多くない。感情動詞のかなりの部分が、〈自発的受身〉を作らないからである。たとえば、

諦メル、呆レル、慌テル、イカル、怒ル、恐レル、脅エル、悲シム、我慢スル、嫌ウ、苦シム、困ル、尊敬スル、楽シム、憎ム、ビックリスル、迷ウ、喜ブ

などの感情動詞は、〈自発的受身〉を作らない。「嘆ク、悩ム」なども、やはり〈自発的受身〉を作りがたい動詞であろう。これらは、普通のまどもの受身を形成するか、そもそもまどもの受身を作らないかのいずれかである。〈自発的受身〉と言えば、〈契機的自発性〉のタイプが、まず取り挙げられるにも拘わらず、その数が多くないのは、上に見たように、〈契機的自発性〉の形成の中心となる感情動詞の、そのかなりの部分が〈自発的受身〉を形成しないことによっている。

以下に、典型的な感情動詞からは少しずれたところにあるものの、それに繋がっていく活動を表す動詞として、〈契機的自発性〉の〈自発的受身〉を形成している例を一二挙げておこう。

(12) そのか弱い子供を妻がおとなしく大切に看取りそだててくれさえすればと、妻の心の和平が絶えず<sup>いの</sup>縛られるのだった。(崖の下)

(13) 「ほぼ同着ですね。」

「結果の発表が待たれるところですね。」(競馬のテレビでの中継)

などのようなものは、やはり、〈契機的自発性〉の〈自発的受身〉の一種であろう。これらは、いずれも、感情的な心的活動に類する、あるいはそれに極めて近似していくものである。

### 3.3 論理的自発性

次に、〈論理的自発性〉について見ていこう。これらは、前提となる状況・事態が存在したり想定できたりし、その前提からすれば、当の〈自発的受身〉で述べられている思考・認知活動の内容の成立が、当然であり論理的に自然であり、そのことを通して、そういった内容を引き出した思考・認知活動の出来が当然であり自然である、といった意味合いを帯びているものである。以下、

実例を少しばかり挙げておこう。

- (14) しかしオーストラリアの有袋類からカンガルーばかりでなくて、狼のようなものや熊のようなものや鼠のようなものまでが新成されたことを考えると、種の形成の背後にはさらに一つの階級の、あるいは生物の全体社会の進化を方向づけている、階級のあるいは全体社会の自己完結性といったものが考えられるであろう。(生物の世界)
- (15) 約束どおり電話は夕食どきにかかって来た。思いなしかいささか沈んだ声であったので話の中味ははなから予想された。(旅)
- (16) 司法解剖の結果、凶行時刻は十七日午後十一時から十八日午前一時までの間と推定された。(公開捜査林道)
- (17) わめきたてられている相手は背こそ高いがほっそりとした顔の蒼白い若い男で、その肩まで伸びた長髪の黒さからみても、顔つきからみても、あきらかに東洋人らしかった。それも、おれのカンでは、どうも日本人くさく感じられた。(彼等地の塩とならず)

などが、この〈論理的自発性〉の〈自発的受身〉の実例の一端である。これらの例においては、「～ヲ考エルト」「～シタノデ」「～カラミテ」のように、いずれも、判断や思考の前提・根拠として存在・想定された事態や状況を表しており、〈自発的受身〉に表されている思考・認知活動の対象たる内容が、その前提・根拠から論理的に当然ないしは妥当で自然なものとして、引き出される、といった意味合いを帯びている。

〈契機的自発性〉と〈論理的自発性〉は、繋がり連続する部分を有しながらも、全同ではない。論理的な自発性は、思考・認知活動の対象たる内容の成立が、前提から論理的に当然・自然なものであるといったことにおいて、そういった内容を引き出した思考・認知活動といった事態の出来が、論理的に当然・自然なものである、ということであって、〈契機的自発性〉と異なって、必ずしも、事態の成立に主体性がまったく関与しえないことを意味しはしない。たとえば、

- (18) しかし被害者の臙内に犯人の体液が残っていない。用心深い犯人はコンドームを用いたものと考えられた。(公開捜査林道)

などでは、下線部の事実を根拠にして、判断内容が引き出されているのである。根拠とされている事態から判断内容の引き出しは、論理的に当然であり妥当で自然なものであるにしても、その判断内容の引き出しには、主体的な推論作用が関与している。根拠とそこから引き出される判断・思考内容の論理的な妥当

性・自然さを表すことによって、引き出すといった働きの妥当性・自然さを表したものが、この〈論理的自発性〉である。その意味で、この種の〈論理的自発性〉の中には、(18)のように、主体性が少なからず存しているものがある。この点は、事態の出来が、ひたすらある契機によって自動的に引き起こされることを意味する〈契機的自発性〉と異なっている。

思考・認知活動の対象たる内容の成立が、前提・根拠から論理的に当然ないしは妥当で自然であることを表すことは、そういった内容を引き出すことが可能である、といったことに繋がり、したがって、〈論理的自発性〉は、可能の表現に繋がり連続していく。

ここで、この〈論理的自発性〉の〈自発的受身〉を形成する動詞を、少しばかり挙げておくことにする。たとえば、

考エル、認メル、認識スル、確認スル、察スル、解釈スル、解スル、理解スル、了解スル、把握スル、受け取ル、推定スル、推量スル、推測スル、推察スル、想定スル、予想スル、予測スル、空想スル、妄想スル、疑ウ、伺ウ、信ヅル、見ル、眺メル

などが挙げられる。さらに、「思ウ、想像スル、感ヅル、感ヅ取ル、意識スル、見ナス」などは、〈契機的自発性〉でも〈論理的自発性〉でも使われよう。

#### 4 自発的受身のタイプと否定形

既に、〈自発的受身〉を〈契機的自発性〉と〈論理的自発性〉の二タイプに分けた。〈自発的受身〉の下位的タイプの別が、否定形を取りうるか否かに、ある種の影響を与えている。

〈契機的自発性〉のタイプでは、たとえば、

(19) その高麗犬のような顔を見ていると、なぜともなく死んだ父の顔が  
思い出されてきた。(トルストイ爺さん)

(19') \*ソノ高麗犬ノヨウナ顔ヲ見テイルト、ナゼトモナク死ンダ父ノ顔ガ  
思い出サレテコナカッタ。

(20) こんなことなら、店や家をあけるのではなかったと悔やまれた。

(厄介な荷物)

(20') \*コンナコトナラ、店ヤ家ヲアケルノデハナカッタト悔ヤマレナカッタ。

が示しているように、事態の出来を表す肯定形は容認されるが、それに対して、事態が出来しないことを表してしまう否定形が現れることはないだろう。このことは、〈契機的自発性〉の特性に大きく関わっているものと思われる。これは、〈契機的自発性〉の〈自発的受身〉が、ある出来事・事態を契機として自動的に引き起こされる事態を表していることによっている。〈契機的自発性〉が、このようなものであることによつて、その出来を表す肯定形は、出現可能であるが、その出来を表さない否定形が来ると、不適格な文になってしまう。

もっとも、問いかけの文にすれば、話は別である。「死ンダオ父サンノ顔ガ思イ出サレテキマセン カ?」「家ヲアケタコトガ悔ヤマレマセン カ?」のように、否定形が現れる。これは、述べ立ての文が、契機からの自動的な事態の出来を述べたものであるのに対して、問いかけの文になることによつて、出来そのものが問題になっているのではなく、出来の有無が問題になることによるのであろう。

〈契機的自発性〉では、否定形は、もはや受身動詞に留どまることができない。「\*イクラ写真ヲ見テモ、アノ頃ノコトガ思イ出サレナイ。」とは言わず、「イクラ写真ヲ見テモ、アノ頃ノコトガ思イ出セナイ。」のように、可能動詞にならなければ、否定形を取りえない。

それに対して、〈論理的自発性〉の〈自発的受身〉の文では、事情は少しばかり異なっている。たとえば、

(21) ~、幼い頃の思い出に徹らしても、児輩の神経はそういう場合に耐えて行く、意外な強靱さを持っていることが考えられる。

(かむなぎのうた)

(21') だから唐沢がスムーズに車をひろうことができたとしても、九時半までに宝葉荘をたずね、そこでピースを一服したのち、おもむろに三田を殺したとは考えられなかった。(急行出雲)

(22) その青年の名は、宿帳には近藤啓一と記されていた。しかし多年の私の経験からいって、この名が恐らく本名でなかろうということは、容易に感じられたことだったのである。(妖婦の宿)

(22') ~、二人共、大した美人である。そして、垢抜けがしていた。玄人あがりに違いない。世話女房的なところは、どちらの女からも感じられなかった。(国道駐在所)

などの例文から分かるように、〈論理的自発性〉の〈自発的受身〉では、前提となる状況・根拠から、思考・認知活動の対象たる内容が、論理的に当然ない

しは妥当で自然なものとして引き出されることを表す肯定形だけでなく、その前提からは、そういった思考・認知内容が引き出せないことを表す否定形の、双方が出現できる。否定形は、存在する前提・根拠から、そういった思考・認知内容を引き出すことが、論理的に当然さや妥当性や自然さに欠ける、といったことを表し、肯定形のタイプより、さらに、〈可能の表現〉に近づいていく。これらは、〈論理的自発性〉が、直接、事態の出来そのものが、ある状況・根拠から自動的に引き出される、といったことを表しているのではなく、思考・認知内容の引き出しが、論理的に当然で自然である、といったことを表していることによっている。

このように、肯定形・否定形の出現といったところにも、〈自発的受身〉の下位的タイプの有している性質の異なりが影響を与えていることを見て取ることができよう。

## 5 自発的受身とテクル形・テイク形

### 5.1 自発的受身とテクル形

〈契機的自発性〉に属する〈自発的受身〉の中には、事態の出来が、ある契機からおのずと引き起こされることを表すことによって、〈出現する動きの発生〉を表すテクル形(「オヤ、雨ガ降ッテキタ。」のようなもの)と共起する場合が少なくない<sup>3)</sup>。実際、

(23) その高麗犬のような顔を見ていると、なぜともなく死んだ父の顔が思い出されてきた。(トルストイ爺さん)

(24) ～、また、代々阿部井氏の、愛刀ぶりがしのばれてくる。

(安房国住広正)

などの実例が示すように、〈契機的自発性〉の〈自発的受身〉は、〈出現する動きの発生〉を表すテクル形を取って、現れている。外に、「それほど骨折りでもないように思われてきた。(溺れ谷)」のような例が存するし、「漠然ト感ジラレテキタ」「ソウイッタ噂ヲ聞クニツレ、彼ノ健康状態ガ懸念サレテクル」「コウナルト、彼ノ出方ガ期待サレテクル所デスネ」「父ノオ棺ノ前ニ座ッテイルト、生前ノ親不孝ガ悔ヤマレテクル」のように、かなり、自由に〈契機的自発性〉のタイプに対しては、〈出現する動きの発生〉を表すテクル形を付加することができる。もっとも、「??結果ノ発表ガ待タレテクル」や「??謙虚ナ

対応ガ関係者ニ望マレテクル」のように、〈契機的自発性〉のタイプに属すると思われるものの、〈出現する動きの発生〉を表すテクル形を取らない(取りにくい)ものもないではない。

それに対して、〈論理的自発性〉のタイプに、〈出現する動きの発生〉を表すテクル形が現れることは、基本的にはないだろう。

## 5.2 「忘レル」と自発的受身とテイク形

上で見てきた〈出現する動きの発生〉を表すテクル形と共起する〈契機的自発性〉のタイプは、いずれも、その〈自発的受身〉によって表されている事態が、出現型の動きを表すものであった。言い換えれば、動きそのものが、出現型であることによって、テクル形と共起しうることが可能になっていると言えよう。ここで、「忘レル」といった動詞について、少しばかり見ておこう。

(25) 辻はしかしこれぞ特ダネの気持ちで長文の記事を送った。しかしそれは地方版の隅っこに二段の小さい記事でのせられただけだった。この事件もそろそろ忘れられようとしていた。(能面の秘密)

のような、「忘レル」タイプの動詞の受身については、どのように考えればよいのであろうか。本稿では、この種のものも、事態がおのずと出来るといった意味合いを帯びていることをもって、やはり、〈自発的受身〉の一種として扱っておくことにする。もっとも、能動文でのガ格成分が、受身文の表現形式の上に顕在化しないのが普通である、といった点で、通常の〈自発的受身〉と共通するものの、次に述べるような点において異なっている。通常の〈自発的受身〉においては、通常顕在化させられることのない能動文のガ格成分は、話し手であるのが普通であり基本であった。それに対して、この「忘レル」のタイプでは、例文が示しているように、不特定多数者を取る(もっとも、話し手たる仕手がまったく取れないわけではない)。その意味で、この「忘レル」タイプの受身を、〈自発的受身〉の一種とするとしても、さらに、その中でも特殊なものとして扱う必要があるだろう。

また、〈契機的自発性〉の〈自発的受身〉が出現型の事態を表していることによって、〈出現する動きの発生〉を表すテクル形を取りうるものの、〈消滅する動きの発生〉を表すテイク形を取りえないのに対して、「忘レル」の類は、以下の実例が示すように、〈消滅する動きの発生〉を表すテイク形を取りうる。これは、「忘レル」の類が、消滅型の動きを表していることによっている。

- (26) それらは前よりはもっと少ない衝撃で僕の心に受け入れられましたし、あれほど一時は信者を困惑させた事件も、少しずつ忘れられていきました。(影)

以上の点からも、「忘レル」の類によって形成される受身は、〈自発的受身〉であるとしても、そのさらに特殊なタイプということになる。

## 6 能動文でのガ格成分の現れ方

〈自発的受身〉の有している特性への検討の最後として、〈自発的受身〉において、能動文ではガ格で表示されていた成分(以下、〈原ガ格成分〉と仮称)が、どのように現れるかを見ておくことにする。

### 6.1 一人称者の原ガ格成分不在

先に、原ガ格成分は、受身文の表現形式の上に顕在化しないのが、普通であり、通常顕在化させられることのない原ガ格成分は、話し手であるのが通例である、と述べた。これが基本であって、主流である。今まで挙げてきた事例の多くは、このタイプである。たとえば、

- (27) 「なにかこうあちらは、人間も品物もがさごそしてしまして、それがたいそうそっけなく思われました。」(流れる)

のようなものも、その例である。

### 6.2 一人称者の原ガ格成分顕在

もっとも、これは基本的な傾向であって、これと異なった場合が存しないわけではない。まず、原ガ格成分が受身文の表現形式の上に顕在化する場合から見ていこう。その第一として、話し手である原ガ格成分が顕在化するケースから見ておく。たとえば、

- (28) この～実業家が、まるで青年のように、思い悩んでいるのを見るのは、私にもなんだか胸をつかれる思いだった。

諦めたと口ではいっているものの、心ではまだ十分の未練が残っていることが、私には自分のように、よく感じられたのだった。

(妖婦の宿)

などが、話し手である原ガ格成分が顕在化する例である。この例は、「Nガ私ニ感ジラレタ」のように、原ガ格成分の語順、その表示形式ともに、「広志ガ武ヲ毆ツタ⇔武ガ広志ニ毆ラレタ」のような、通常のままの受身と同様の現れ方をしている例である。しかし、話し手である原ガ格成分が、こういったあり方で現れるのは、むしろ稀である。

まず、原ガ格成分の表示形式の点において、

- (29) 彼の絵はそういう精密な画でなく、一刷毛に描かれたような遠方の人物の形にも、奇妙な現実感があって、同じ不幸な悩んだ心を表しているように、私は感じられる(歩哨の眼について)

などのように、出現している原ガ格成分の語順の点では、ヴォイス的転換の対象となっている能動文での非ガ格成分に後行しているものの、「ニ」を伴わず、単に「Nハ」の形で現れてくるものがある。

次に、語順の点において、

- (30) むしろ、わたしには、『甲陽軍鑑』や『三河風土記』のなかに述べられている駿河における信虎のうごきのほうに、かれの甲斐の国からの追放は、かれとかれの息子が合意の上でうった芝居であるといえはいえないこともなさそうなふしぶしがみられるようにおもわれる。

(群猿図)

などのように、通常のままの受身と異なって、ヴォイス的転換の対象となる能動文の非ガ格成分に対して、先行して現れることがある(もっとも、通常受身文においても「広志ニ武ガ毆ラレタ。」のように、語順に転倒が起こらないわけではないが、その場合には倒置感が付きまとう。それに対して、この自発的受身の場合、倒置感が伴わない)。もっとも、(30)は、それでも、原ガ格成分が「Nニ」の形で表示されているものであった。

さらに、

- (31) こう思うと、私もなんだか恐ろしい不思議な胸騒ぎが感じられてならないのだ。(妖婦の宿)

のような例になると、原ガ格成分が先行しているといった語順の点においても、「ニ」といった形式を伴っていないという原ガ格成分表示形式の点においても、通常のままの受身とは、かなり異なっている。通常のままの受身が、「\*広志ハ武ガ毆ラレタ。」といったふうに、これと同じタイプの原ガ格成分のあり方を取ると逸脱性を有する文になってしまうことからすれば、こういった原ガ格成分の表現形式への現れ方は、〈自発的受身〉の重要な特性をなしている。

これは、〈自発的受身〉が、文的存在を対象に取る動詞によって、形成されているということと関係してくる現象であろう。

### 6.3 原ガ格成分が一人称者以外の場合

〈自発的受身〉の原ガ格成分は一人称者でかつ顕在化しないのが、その基本であり、それがまた通常のまともな受身との異なりであったが、典型から外れていたり(既に触れた「忘れる」による自発的受身がこれ)、ある条件下に生起することによって、その基本は崩れていくことになる。以下、一人称以外の原ガ格成分が現れている場合について、ごく簡単に見ておこう。

これには、物語などにおける視点の移行によるケースが、まず挙げられる。たとえば、

(32) 沢子が暗に仁科のことばを伝えていることが、高梨には感じられた。

「怖いのは男ばかりとはちがうね。お前らにグルになられてはかなわん。」

それは偽らざる実感だった。(水子地藏の樹影)

(33) それでも、滝上には、有楽町 — 四谷見附間を、車が一呼吸のあいだに走り抜けたように感じられた。(海軍某重大事件)

などが、非一人称の原ガ格成分が出現している例である。語順の点で、(32)が、原ガ格成分が能動文での非ガ格成分に後行する、といった通常のまともな受身と同じあり方をとっているタイプであり、それに対して、(33)が、通常のまともな受身とは異なって、先行するといったあり方をとっているタイプである。しかし、いずれにしても、これらに三人称者の原ガ格成分が現れているのは、物語であることによる視点の移行によっている。

次に、文のモダリティのあり方が、原ガ格成分が非一人称者を取ることに影響を与えている場合について、ごく簡単に触れておこう。

これは、「故郷ノコトガ懐カシク思イ出サレル。」のような断定の述べ立て文が、一人称の原ガ格成分であるのに対して、「故郷ノコトガ懐カシク思イ出サレルラシイ。」のような伝聞や徴候の元での押し量りの文にすれば、原ガ格成分は三人称に、「故郷ノコトガ思イ出サレルノ？」のように、問いかけの文にすれば、原ガ格成分は二人称に変わる、といった問題である。実例を挙げておく。

(34) 章映伝が雷雨の朝のとびこみ客である私に、なぜそんな大切な秘密を

打ち明ける気になったのだろうか?～。小説家として虚名を得ているのでなんとなく信頼できそうに思われたのかももしれない。

(枇把の木の下)

などがそうである。「思われた」の原ガ格成分は「章映伝」である。ただ、こういった現象は、何も〈自発的受身〉だけに限られたことではない。感情・感覚を表す形容詞文にあっても、同じようなことが観察される。

最後に、〈自発的受身〉に特徴的な原ガ格成分の表示形式について、ごく簡単に触れておく。「Nニトツテ」といった形式は、通常のみまもの受身にも現れないことはないが、やはり、それらではかなり特殊な位置を占めるものであった。それに対して、この〈自発的受身〉では、比較的重要な原ガ格成分表示形式である。たとえば、

(35) 石戸にとって、ことは急を要すると思われた。

うっかりしていると、どんな邪魔が入らないともかぎらない。(霧鐘)のようなものが、それである。

また、さらに、

(36) 健康な人から見ると馬鹿馬鹿しく思われるかも知れませんが、我々、胸部の病人は社会人にたいしていいようのない劣等感があります。

(男と九官鳥)

のような例は、「健康ナ人ニハ」に近く、「Nカラ見ルト」全体で原ガ格成分表示形式相当になっている。

以上、能動文でのガ格成分が、受身文においてどういった現れ方をするのか、という点においても、〈自発的受身〉は、通常のみまもの受身とは少しばかり異なった現れを示すことが分かった。

以上、述べきたったところから、従来、自発と呼ばれていたものは、受身の、さらに言えば、その中の〈みまもの受身〉の特殊なものとして位置付けることが、それなりに可能であると思われる。

注

- 1) 共演成分については、仁田義雄1993を参照。
- 2) この現象については、詳しくは仁田義雄1997参照。
- 3) 森山卓郎1988をも参照。

参考文献

- 森山 卓郎1988 『日本語動詞述語文の研究』(明治書院)
- 村木新次郎1991 「ヴォイスのカテゴリーと文構造のレベル」『日本語のヴォイスと他動性』(くろしお出版)所収
- 仁田 義雄1991 「ヴォイス的表現と自己制御性」『日本語のヴォイスと他動性』(くろしお出版)所収
- \_\_\_\_\_1993 「日本語の格を求めて」『日本語の格をめぐって』(くろしお出版)所収
- \_\_\_\_\_1992 「持ち主の受身をめぐって」『藤森ことば論集』(清文堂出版)所収
- \_\_\_\_\_1997 「内容の受身」『加藤正信先生退官記念国語学論集』(明治書院)
- 奥津敬一郎1982 「ラジオ・テレビニュースの受身文」『日本語談話構造の研究』(昭和56年度放送文化基金研究中間報告)
- M. Sibatani1985 'Passive and Related Constructions' "Language"  
Vol. 61, No. 4
- 鈴木 重幸1972 『日本語文法・形態論』(むぎ書房)
- 高橋 太郎1988 「動詞 その(6)」『教育国語』93号
- 寺村 秀夫1982 『日本語のシンタクスと意味I』(くろしお出版)

(にった よしお・大阪大学助教授)